

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.102

2009年12月16日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 パパ・グンバドへの巡礼 (画・甲斐大策)

この26年で最大規模の仕上げ作業

中村 哲

26年に及ぶ数々の忘れがたい思い出を残しつつ

イクラムラ・ハーン

貧しい人々への診療を託して

藤田千代子

みんなの笑顔に励まされ

梅本霊邦

共に働いたアフガンの仲間たち (続)

松永貴明

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

この26年で最大規模の仕上げ作業 正念場です。ご協力を切にお願い申し上げます。

去る 8 月、マルワリード用水路 24.3 キロメートルの開通は、明るい壮挙として伝えられました。日本・現地一体となり、多大のエネルギーが費やされました。加えて、念願のマドラサ建設も大詰めを迎えています。一連の報道で、「ペシャワール会も遂に撤退するのか」という印象が広がりましたが、実は今が一番の正念場だと訴えたかったのです。当方の予想では、おそらく来春から大きな動きが始まり、渡航や送金ができない事態を想定し、おそらくこの 26 年で最大規模の仕上げ作業を、全力で完了しようとしています。

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長 中村 哲

PMS 病院を譲渡

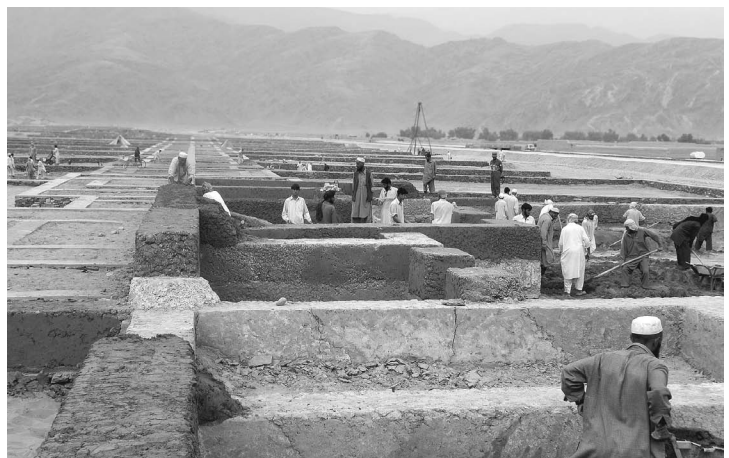
みなさん、いかがお過ごしですか。

一月初めに帰国していましたが、まもなく現地に戻ります。

この一年、現地でも様々な出来事がありました。パキスタン北西辺境州の内乱状態、アフガン反政府勢力の活発化が米国・NATO 軍の増派でさらにひどくなり、欧米軍の侵攻以来、治安は最悪となりました。外国軍の死者も過去最悪を記録しています。

一〇月に行われた大統領選挙による混乱に続き、一二月、燃え盛る火に油を注ぐように、英米軍の大量増派が決定され、アフガン情勢は危機的な転機を迎えようとしています。紛れもなく、ひとつの破局が始まったと言えます。

私たちの現地活動も、それに翻弄され続けながら今日に至っています。二〇〇九年を振り返ると、大変めまぐるしいものがありました。医療活動が戦火によって後退しました。市街戦と爆破事件が日常化する中で日本人スタッフの渡航が不可能となり、肝腎の基地であった PMS（ペシャワール会医療サービス）病院が七月、地元団体に譲渡されました。これは二年半前から予想したことでしたが（註 一〇〇七年一〇月「ペシャワール会報」No.93 参照 本文末に再録）、これほど急速な転回とは思いませんでした。地元団体を構成



自立定着村居住区。まず 20 戸を作り、来年早々開拓農民の生活が始まる

しているのは旧職員の有志たちで、北西辺境州の戦乱で発生した二〇〇万人の避難民があふれる中、とどまって活動を続けています。

なお、一年半前からカイバル峠は外国人の誘拐、欧米軍への襲撃が日常化、ペシャワール・ジャラバード間の交通は現在、地元民でも危険となりました。

この結果、現地活動の中心がジャラバードに移りました。ペシャワール会は、拠点とするペシャワールにあってアフガニスタン・



ガンベリ沙漠横断水路（通水後）

パキスタン両国にまたがる活動でしたが、両翼の一つを失ったことになりました。今後、活動はアフガニスタンだけに限定されることとなります。かつて、カブールの臨時診療所を入れると一ヶ所あったものが、ドラエヌール診療所を残すのみとなったのです。それも、戦火によることを思えば、内心穏やかでないものがあります。

現地PMSの名称変更

戦争の惨めさは、膨大な死者を出すだけではありません。敵意を煽る風潮が、時には意図的

に、偏見と対立を助長します。米軍のパキスタンへの戦火拡大は、これまであったアフガン人とパキスタン人との反目を助長し、今度は「ベシワール」の名がアフガン政府側から偏見の目で見られ、パキスタン側ではアフガン人追いついに拍車をかけました。

「PMS」の名は、東部アフガンの人々にとって広く親しまれてきましたが、職員が身分証明書の提示を求められ、拘引されることがまれでなくなってきました。中央からやって来た警官や外国兵が、「ベシワール」という名前だけで、怪しいと見るのです。このため、職員百数十名の安全を考え、現地活動組織の名称変更を余儀なくされました。二〇一〇年から、PMSは、Pehawar-kai (Japan) Medical Services から、Peace (Japan) Medical Services へと変わります。しかし、地域住民の間では「PMS」のままで、殆ど変化ありません。また日本のベシワール会の名称変更はありません。

今が一番の正念場

この中にあって、去る八月、マルワリード用水路二四・三キロメートルの開通は、明るい壮挙として伝えられました。日本・現地一体となり、多大のエネルギーが費やされました。加えて、念願のマドラサ建設も大詰めを迎えています。

一連の報道で、「ベシワール会」も遂に撤退



マドラサ全体を眺める。手前が用水路。周辺は完全に耕地を回復した

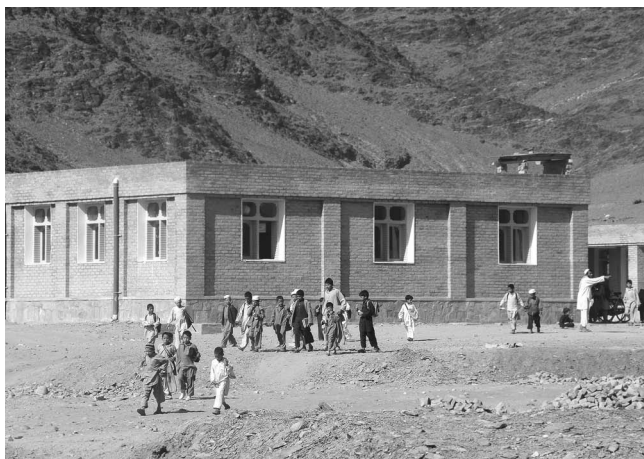
するのか」という印象が広がりましたが、実は今が一番の正念場だと訴えたかったのです。当方の予想では、おそらく来春から大きな動きが始まり、渡航や送金ができない事態を想定し、おそらくこの二六年で最大規模の仕上げ作業を、全力で完了しようとしています。

開通した用水路は、その後の維持を可能にするため、様々な付帯工事が残っているし、湿害対策のための長大な排水路、開墾地の分水路などが整備されないと、とても「工事完

「成」とは言えません。これらを二〇一〇年二月までに完了し、不測の事態に備えるのです。

農業チームの成果生かす

犠牲になった伊藤和也くんの関わった試験農場は、ダラエヌール渓谷下流域の沙漠化が迫り、まもなく耕作ができない状態になりつつあります。そこで、開墾中のガンベリ沙漠に移し、いずれ二〇〇ヘクタールを確保、開拓農家の自給自足を目指すと共に、より大規模な形で農業チームの成果を生かす予定です。数々の試行錯誤で得たものを、今度は実際に流通機構にのせ、



マドラサから下校する子供たち

より実際のな市場での反応を調べることができるようになります。その意味で、水路の行き着く沙漠の開墾は、重要です。

早々とその明るい可能性を確信させたのは、四月段階で同沙漠に到着した第一弾の分水路の水でした。約二五〇ヘクタールで住民たちがスイカを植え、今や一大産地となり、ジャラバードからカブールの市場を総なめにしたのは、先に報告したとおりです。このとき活躍したスイカの種が、何と日本から輸入されたものでした。沙漠の開墾に大きな希望を与えた出来事でした。

マドラサの開校

マドラサ（モスク付属学校 前頁写真）の方は、九月から六〇〇名の学童が通学しています。モスクの内外装と運動場の整備を行い、二月に地元へ譲渡式を行います。これは水と同様にアフガン農村に不可欠なもので、ともすれば流血の衝突を招く民族や部族の対立を避け、地域共同体の要となり、ジャラバードの街にあふれる孤児たちや普通学校に行けない貧しい子弟たちに教育の場を提供します。

不動の良心を対置

PMSの手がけたマルワリード用水路以外の、近隣地域の取水堰の最終的な改修も行う計画です。（取水堰は通常数年をかけ、改修をくりかえして安定します。冬の低水位期でな

いと、河の工事ができないのです。）現在、マルワリード用水路とシェイワ用水路併せて三五〇〇町歩、ベスード郡三五〇〇町歩、カマ郡七千町歩、合計一四〇〇町歩が沙漠化をまぬがれ、六十万の農民たちの生活を可能にしています。これも何とか守らねばなりません。

人々は三〇年を超える戦乱、そして進行し続ける大旱魃に疲れ切っています。いわゆる国際社会の間で、「アフガニスタン」は何度も忘れ去られてきました。「外国に荒らされ続けた」との思いが人々の中に広がっています。「食べられなくなった自給自足の農民たち」が都市に流れ、職がなく放置される中、皆が夢見るのは、水の流れる故郷で耕して食を満たし、家族と一緒に平和に暮らすことです。それ以上の望みを抱く人は少ないでしょう。そして、その最低限の望みは、人間ならば誰でも共有できる世界中の願いでもあります。

「三万人の兵力増派」に、二・五兆円が使われる一方で、数百万万人の罪のない飢えた人々がさまよう。外国がつぎこむ国際貢献のお金が増える度に、一部の人々だけに華美と贅沢がはびこり、巷には流血と飢餓が広がる。こんな世界は異常です。

私たちの支援は決して大きなものではありません。しかし、貧しい人々がやっと帰農できた総計約一万四千ヘクタールの貴重なオアシスです。ナンガラハル州北部六〇万人の農

民たちの生命がかかっています。

足音高く近づく暗雲を目前に、なんとか彼らの生命と生活を保障し、「平和」の何たるかを突きつきたいと思います。ここ数カ月間が私たちの築き上げてきたものの総仕上げであり、こころない戦争に、不動の良心を対置するものであります。

内外ともに暗い世相であればこそ、敢えて人としての明るい希望を分かちたいと思います。ことはこの数カ月間の最後の大工事にかかっています。会員の皆さんのこれまでの御厚意に心から感謝し、さらに御協力を切にお願い申し上げます。

良いクリスマスとお正月をお迎えください。

(註)

PMSは一九八六年、難民救援団体としてパキスタン政府に登録され、当事無視されていたアフガン人のハンセン病患者の診療から出発、その後アフガニスタン山村部の無医地区診療モデルを作ることを目指して活動を続けてきました。

一九九八年四月、このために恒久的な基地病院をベシャワールに建設、パキスタン政府に認められた難民支援の国際団体であると同時に、北西辺境州政府に認可された団体（社会福祉法人）として二重の地位を得ました。これは、半永久的なハンセン病専門施設を置き、長い年月を要する同病の患者のケアを目指したものであります。

また、「いづれ難民機関のステータスは消滅するので、地域の医療機関として根を下ろしたがい」とのパキスタン政府高官の勧めに従ったものであります。私たちは、「これに現地に土着化して活動できる」と信じ、完璧に合法性を遵守してきた積りでいました。

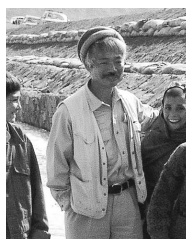
しかし、今年（二〇〇七年）五月になってアフガン難民強制帰還の動きが始まると、突然「診療内容の改善命令」が中央政府から出されました。「正規の看護師がいらない。州政府への二重登録は違法である。州政府認可なら外国からの運営費を使わず、管理者はパキスタン人でなければならぬ」というものでした。調べてみると、確かに法的には改善命令は正しいものでした。ただ、解せないのは、それなら何故九年前にそれを知らなかったかということ。また、ハンセン病に対する医療関係者の偏見が強く、パキスタン人の医療者は就職したがりません。それに、ハンセン病の合併症は、整形外科、形成外科、眼科、皮膚科、神経科と、総合的なケアを要するので、特別な訓練が必要です。やむなく、自前で診療要員を育て上げ、現在に至っています。

そこで、合法性を得るために、資格のあるパキスタン国籍の看護師、医師などを雇用し、「基準」を満たす努力を続けました。だが今度、日本人ワーカーのビザ取得が困難になりました。ひどい場合は、二週間しか滞在が許されず、出入国を繰り返していると診療ができないのです。それでも患者のために不便を凌いできましたが、ひとつ「改善」を達成すると、また次の「改善点」が要求されます。

こうして役所との対応に忙殺され、とても診療ができる状態ではなくなりつつありました。

ついに万策尽き、疲れ果てた当方は、「改善命令が事実上の閉鎖要求であり、難民強制帰還に伴う国家方針」であることを悟り、拠点をアフガニスタンに移して実質的な診療に力を注ぐべきだとの結論に至りました。

（ベシャワール会報）No.93の中村医師の報告より）



中村 哲（てつ）
なかもち
九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来二六年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。

二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地一六〇〇ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手。〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約七万人（二〇〇八年度）。

26年に及ぶ数々の忘れがたい

思い出を残しつつ

— PMSの閉鎖とTMSの多難の出發

PMS事務長 イクラムラ・ハーン

はじめに

二〇〇九年は、パキスタンにとってもPMS（ペシャワール会医療サービス）にとっても良い報告の出来る一年ではなかった。自爆テロや特定の標的を対象とした殺害・誘拐事件の件数がピークに達した。一般大衆は不安定で無秩序な状態に心底怯えきっている。その日の仕事を終え家路に着く時、我が家に無事帰れるのだろうかと不安を抱いている。このような状況を受け、各警察機関は都市・軍機関連部の警備を強化したが、その結果数多くの場所が「立ち入り禁止」区域になってしまった。人も車両も検問を受けなければならないため、日常業務に大きな支障をきたしている。このような情勢に加え、生命の危険まで侵される事態が生じてしまったため、日本人スタッフは二〇〇八年一月に一時帰国を余儀なくされた。その後も情勢は改善どころかむしろ悪化しており、最終的には日本の理事会によってペシャワールのPMSの活動を地元NGOに移譲する決定がなされた。一九八三年に日本の方々の寛大なる支援と寄付によって開始されたこの活動は、二六年に及ぶ数々の忘れがたい思い出を残しつつ二〇〇九年に悲しい終焉を迎えることとなった。

医療活動

医療活動は二〇〇八年に設備縮小や活動停止が一部であったものの、通常通り継続はしているが、病床数を二〇床から七床に減らすと共にスタッフの数も減らした。PMSスタッフやその周辺の人々の間でPMSはいずれ閉鎖するのだという印象が広まったため、スタッフの多くが仕事に対するやる気を失ってしまった。チトラール郡のラシユトにある診療所は閉鎖され、地元職員に移譲された。また、治安情勢の悪化や頻発する脅迫事件により外来患者の数もこれまでに比べ減少し始めた。二〇〇九年の部門別診療患者数は以下表の通り。

2009 年の部門別診療患者数

	1-2 月	3-4 月	5-6 月	7-8 月	9-10 月	11-12 月	09 年計	08 年計
入院患者	28	14	24	2	0	0	68	688
外来患者	5,536	6,053	5,842	5,094	3,260	518	26,303	39,103
X 線	0	0	0	0	13	12	25	0
心電図	0	11	7	0	0	2	20	0
超音波	0	110	88	118	71	27	44	1,072
ラボ検査	1,260	1,623	1,190	1,309	602	143	6,133	13,018

ペシャワール周辺の全般的状況と治安情勢

スワート、バジウォールの両部族自治區およびディール地域で軍事作戦が開始されたことによってペシャワールの情勢は悪化し、報復を目的とした自爆テロや標的を絞った殺害事件が急増した。周辺地域の法秩序が失われたために犯罪活動が増え、身代金目的の誘拐が多大な利益を得るビジネスになっている。社会生活はほとんど停止状態である。住民は屋外に出ることを恐れ、バザールは閑散とし、企業は倒産し、日用品が市場から姿を消して一般市民の手の届かない価格でしか買えないという状況が出現しつつある。最初に植物油と小麦粉が品薄になり最後には値段が二倍に跳ね上がった。また砂糖業界では買占



毎朝朝礼が行われたPMS病院（ベシャワール）の中庭

め業者が値段を吊り上げ、その後最高裁判所がこれを違法とする判決を下し、中央裁判所や地方裁判所が値下げを約束したにも関わらず、砂糖はいまだに一般市民の手の届かないものとなっている。外国人に対する脅迫や襲撃未遂事件が増え、ベシャワール市内またその周辺地域における活動停止を余儀なくされている。パキスタン全般、殊にベシャワールでの治安情勢悪化を受け、日本ベシャワール会の理事会はPMSのパキスタンでの活動を地元理事会に移譲する決定を下したが、二〇〇九年二月までは

財政的支援の継続を保証した。それ以降は我々が独自に基金をつくり運営することになる。法的要件に従い、同理事会の外国人理事全員の辞表が提出された。新理事が選出され、PMSの名称についてはTMS (Town Medical Services)と変更することが理事会によって承認された。これらの内容をもとに政府登録機関に承認申請を提出した。

ベシャワール会

パキスタン・プロジェクトを委譲

政府登録機関より、理事会における外国人理事の存在について連絡があった。ローカルNGO登録の場合、外国人が理事になることは許可されず、もし外国人が理事として名を連ねている場合は国際NGOとして登録しなければならぬとの事であった。しかし現在の治安情勢下では外国人がベシャワールに来て理事会に出席するというのは不可能であり、一方外国人理事不在では理事会は法的に無効となってしまう。法的手続き完了のために日本人とアフガン人理事全員が理事会に辞表を提出、我々は胸が塞がる思いで辞表を受理した。PMSの活動に長年にわたって関与し、心情的にも深い愛着を抱きながら職を辞していく各理事に感謝状が渡された。PMSの創設総責任者である中村哲医師からPMS運営権が地元管理組織に移譲され、これを以ってTMSは二〇〇九年九月一日より部分的に業務を開始した。旧職員

にはPMSより退職金が支払われ、新たに新管理組織（TMS）との間で就労契約が結ばれた。

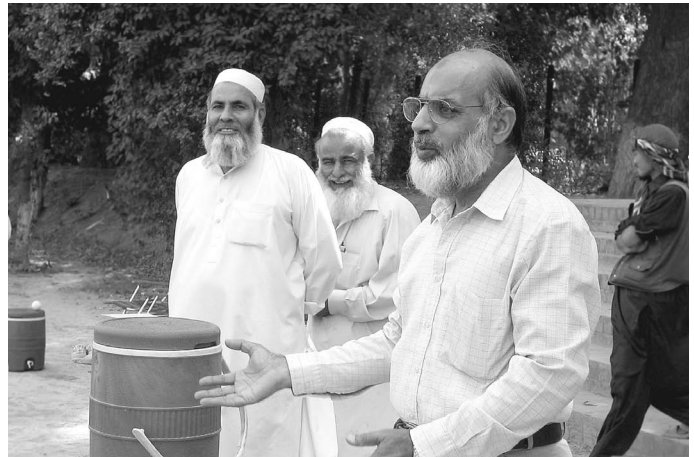
資金調達手段

資金調達については最後の理事会において、十分な討議がなされた。我々が独自の資金で運営できるよう、様々な手段が検討・実施された。政府が腐敗しているパキスタンの現状では、不正な手段を行使せずして政府からの補助金を得ることは不可能である。そこで現在、何とか自らの足で立つて運営できる手段を模索中である。評判の良い民間病院の多くが我々に接触して来たので、PMSに来てもらい協議の場を持った。すべての病院が同じ条件を申し出たのには大変驚いた。慈善病院を経営することよりも収益を上げることに関心を示したのである。

以下にコスト削減のためにこれまでに採用した手段を記す。

1. 勤務態度があまりよくない職員については就労契約を更新しなかった。
2. 各診療費を現行額より少し値上げした。しかし、それでも地元の通常の診療費の半分以下に抑えている。

3. PMSでは高額な薬剤の一部を除いては患者へ無料提供していたが、この慈善病院でも薬剤の無料提供はやっていないので、我々もここ四ヶ月間で徐々に薬剤の無料提供を停止していった。現在、当病院で無料



委譲されたTMSの代表になったイクラムラ氏

提供している薬剤は四点だけだが、割引価格で提供している。

4. 全理事に寄金提供者・団体に接触するよう依頼。現在も誠意努力中だが、今のところ寄金を提供してくれそうなところは見つからない。またパキスタン慈善審議会（PCP）への登録を検討しているが、条件や手続きが煩雑で時間がかかっている。出来れば一ヶ月以内には書類を提出し登録できるようにしたいと考えている。高額な登録料が課せられるので一種の賭けではあ

るが、ここはリスクを承知の上で申請しようと考えている。

5. 場所を取るばかりで使えない機器や車両を処分する努力をしているが、これまでのところ適正な値段で引き取りたいという申し出はない。また、現在所有している大型車を小型車に換えて運営コスト削減を図っている。つい先日、日常業務用にワンボックス型の軽自動車を購入した。近々もう一台、我々の業務要件を満たす類似のバンを購入する予定である。

6. 今年一二月から、昨年来停止していた一般患者の入院を再開した。今後これら入院患者には入院・投薬・治療・検査について最小額の料金を請求し、営利も上げないが損失も出さない形としていく。^(注)

まとめ

現在、パキスタンは国家として大変厳しい情勢下にあり、国民ひとりひとりもまた同様の状況に直面している。政府指導者たちは私利をむさぼるのに忙しく、国民は自力で生活を支えるのに四苦八苦している。我々の周辺住民は貧しく、なかでも最貧の人々はこれまで二〇年以上も日本からの援助によって提供されていた低料金で診療が受けられることを期待して我々のところにやってくる。今、以前のような料金で彼らを診療することは我々には叶わないが、出来るだけのケアと共感とを与えられる

よう努力していきたい。民間組織は、病める象が倒れ伏したらその死肉を引きちぎって分け前を手に入れようと待ち構えるハゲワシの群れのように、虎視眈眈^{こしたんたん}と我々の動向を凝視している。インシヤツラー、神の思召しにより、そういう事態になることはないと思いたい。神のご加護のもと、我々は今後もペシャワール周辺地域の貧しい人々に市場価格よりもずっと低料金で質の高い治療を提供して行きたいと考え、出来る限りの努力を続けていく。そしていづれ近いうちにその努力が実を結ぶ時が来るだろう。パキスタンのこの状況はいづれ改善し平和が訪れるという希望を捨ててはいない。我々は「ひとつの道が閉ざされても、他に沢山の道が開かれる」という諺を信じている。今後もし日本の方たちが残していかれた財産と福祉事業を守り続けていくことをここに誓うものである。

（注）二〇〇九年八月まではPMSでハンセン病患者のみ入院機能を残していたが、診療に力を注いでいた医療従事者が退職、更にアフガン医師や看護師達が母国へ帰還せざるを得なかった為、ハンセン患者の診療が困難となった。現在PMS（旧）を訪れるパキスタン人のハンセン患者は公立病院へ送っている。アフガン人患者についてはジャララバードに小さな診療所を設置する計画が進められている。

◎ワーカー通信

貧しい人々への

診療を託して

現地連絡員／元・PMS看護部長、院長代理

藤田千代子

たくさんの方が頭に浮かびます

皆様、お元気でしょうか。

早いもので昨年一月にベシヤワールから戻り、一年が過ぎました。

時々、定期的にベシヤワールの病院に来ていた患者のエサスルハックは傷の治療をちゃんと受けているだろうか、手術の残っていたハキマはどうしただろうか、戦闘地になっているスワットから家族一族を病院へ避難させていた看護助手ファズレウィッドはどうしただろうか、アブドラは転勤先のダラエヌール診療所になじんだだろうか……とたくさんの方が頭に浮かびます。

帰国後はイクラムラ事務長や他職員と電話で連絡を取りながら、遠隔操作で病院の運営を進めておりましたが、長い間、現地の職員や患者さん達と直に向かい合って仕事をしてきたので、なかなかこの状況に慣れませんでした。

パキスタンの情勢は刻々と変わり、最近の病院職員の話では「無人機によるワジリスタンでの空爆は止むことなく続き、ベシヤワールでは相変わらずミサイルが落ちてくる。爆破事件も多くなってきた。私達はこのことにだんだん慣れつつになってきている。また、アメリカ人たちがユニバーシティータウンに五〇から六〇軒の家を借りたという噂があり、パキスタンは解体されつつあるのではないだろうか。犠牲祭の間、爆発事件は減少気味だったけどまた始まった。職員の出勤が難しくなりつつあり、住民は危険なので外に出ることが少なく外来患者が激減している」とのことです。

イクラムラ氏に全てを預け

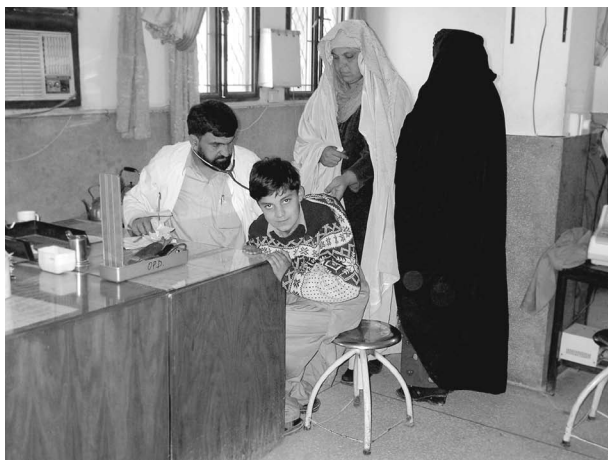
イクラムラ氏とはよく電話で話をしますが、彼の声も暗く、こちらも答えようがない話が多いのですが、それでも現在実際に病院を運営しているイクラムラ氏が、わりと明るく冗談などを交えながら話すのは、他の医療機関より安い診療費で貧しい人達の役に立っていることを話す時です。そんな時は彼が私達の病院に採用面接に来たときの話が思い出されます。

イクラムラ氏はそれまで経営していた小さな会社で政府の役人が無限に賄賂を要求し、断るとあからさまに営業妨害を仕向けてくる

ので辟易していた、そんな時PMSというNGOの活動を知り、自分のやりたいことと一致し、これを生涯の仕事にしたいと思ったとのこと。言葉通り、彼は私達がアフガニスタンで国内避難民の為にカーブルでの診療や食糧配給を始めると、親戚中から衣類などを集め、機会をみてはアフガニスタンへ届けていました。

今年は彼の強い希望で五月からパキスタンのスワットやデール他、戦闘地区からの国内避難民の診療に医療チームを毎週一〜二日、数カ月間派遣しました。

私達は昨年このイクラムラ氏に病院の全てを預け帰国しました。



PMS病院で診察を受ける少年

その後五月のベシャワールでの打ち合わせの後、さらに八月中旬には中村先生とイクラムラ氏、私で話し合いをもちました。治安上の問題がありましたので、残念ながらベシャワールまでは行けずイスラマバードで行いました。彼の話から病院運営で大変苦労しているのが窺え、気の毒な気がしましたが、そうは言いながらも、何とか病院をこれまでと同様に、高い診療費を払えないような層の人々を診る場所にしたいという彼の想いも感じられ、私達が戻れないなら、これから彼を頭とする現地の職員達が仕事をしやすいようにして行かなければと強く感じました。

それまでは、私は数ヶ月もすれば、もしかしたら病院に戻れるのではないかという淡い期待をどこかに持っておりました。しかしパキスタンの状況は悪化するばかりです。遠隔操作での病院運営などというのは、職員の士気の低下と共に秩序を乱し、肝心の診療活動に悪い影響が表れつつありました。

私達が現地へ戻れる可能性のない今、これまで私達が病院や診療所の活動の柱にしてきたハンセン病やアフガン難民診療の他、結核、マラリア、赤痢、腸チフスとあらゆる感染症患者の診療など、特に貧しい層の人達の診療をする、このことを喜びとしている人が現地にいるなら、その人に引き渡した方が良い診療活動ができるのではないだろうかと思えるようになりました。

私は、私達と似た気持ちを持ったイクラムラ氏のような人物に出会えて大変幸運だった

と感謝しています。

忘れないでほしい

この八月の打ち合わせの後、院内の医療器具、機械の補充や新調、診療活動や職員の調整その他、諸々のことが進められています。医療関係者ではないイクラムラ氏には診療活動方面での管理のことではなくさんの困難がある為、しばしば電話で話し合います。彼の口癖は「病院のことを、私達のことを忘れないでほしい」。

私は一九九〇年にパキスタンのベシャワールにあるミッション病院のらい病棟に派遣し

みんなの笑顔に励まされ

元・PMS植樹担当ワーカー

梅本霊邦

パソコン指導の為ジャララバードを再訪

中村哲医師からの要請を受けて、急遽、昨年の末から年を跨いで一ヶ月間、ジャララバードのPMS事務所で働くこととなった。

二月二一日関西空港からドバイ経由でカブールへ、カブールからは国際赤十字のフライトに便乗して、二三日ジャララバードに到着した。

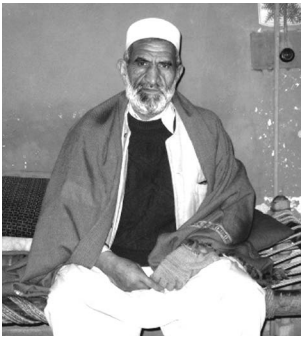
て頂き、最後までパキスタン人、アフガン人問わず、ハンセン病その他、私達を必要とした人達のために働いたことに深く感謝しています。これまで有形無形の支援をして下さった方々に、また長い間に一緒に働いた現地の職員達に心から感謝致します。

これからは遠くからではありますが、イクラムラ氏が率いる病院を、またアフガニスタンの診療所や緑の大地計画で畑を一つでも多く潤そうと懸命に働く中村医師やアフガニスタンの職員たちを応援して行きたいと思っています。引き続き皆様のご支援をよろしくお願い致します。

日本人ワーカーが撤退し、すっかり寂しくなった日本人ワーカー宿舍の閉ざされた門扉の前でブザーを押す。と、おもむろに開く扉の陰から懐かしいママジャンの顔が覗いた。「サラマレーコン！」と一声を発し、握手しながらママジャンと胸を合わせた。

「え、お前は脳疾患で死んだんじゃないのか？」と言いたげなママジャンのはにかむ笑顔に「ムシケルニシター」（問題なし！）とこめかみに指を立て、私は笑って応えた。

ジャ医師やヌール・ザマンに、会計票簿などの書類が自力で作れるように、まずワードやエクセルの基本的な操作を教えてほしい。現行の会計票簿の摘要項目には誤った英語での記述や不整合な英語使用が目立つので、それらを修正してほしい——ジャララバードに着いた日の晩、宿舎で談笑する中村医師か



宿舎家屋の外に置かれた管理人用の寝台に腰をおろす管理人ママジャン。パシュトゥーン人ではないと言う彼の出自を思うと、民族間の過酷な対立抗争は二度と起らないで欲しいと切実に思う。

ら、取り組むべき仕事が具体的に示された。滞在期間は一ヶ月、時間は無駄にできない。ジャララバードに着いた翌日から、さっそくPMS事務所への出勤が始まった。

事務所の総責任者は、帰国した芹沢さんの跡を、ペシャワール病院副院長だったジア医師が継いでいた。マネージャー室では、そのジア医師を補佐すべく、水路現場を熟知するヌール・ザマンが、ジア医師と机を並べていた。

ワード、エクセルならお易い御用！と内心思いつつも、笑顔で迎えてくれる二人の顔を見て、さてこの二人にパソコンと積極的に向き合うだけの十分なレディネスはできているのだろうか、とちよつと心配ではあった。

「エクセル講習会」なるものを、事務所で毎日一定時間開く。忙しい二人にとってこの方法は現実的ではない。日々の業務が滞ってしまふ。実務をこなすなかで、ぶつつけ本番「これはどうしたらいいか?」「これはこうするといいよ」といった具合に、その都度問われたら答える方式のほうが実際のだと考えた。

とりあえず、ジア医師とヌール・ザマンの二

人には表計算ソフトとして秀逸なエクセルの真価を知ってもらうべく、Computer Magicと銘打った演習問題帳(約三〇課)をつくって与えることにした。一ヶ月の短期間で、しかも多忙な勤務時間中に一から十まですべて教えることは不可能だ。適宜各人の空き時間に自修的に学習してもらうことを狙った。当然、それには二人をパソコンに積極的に向き合わせるだけのしつかりした動機づけが要る。Computer Magicと銘打った所以は、まさにそこだ。

え、なんでそんなことができるの?——はじめに驚きありき、その点を一番重視した。その上で、スプレッドシートの基本的な仕組み、基礎的な加減乗除の式の作り方、さらに使用頻度の多い重宝なエクセル関数の使い方などを実際の一通り理解させることを目的に据え、演習問題をつくった。

狙いの中。ヌール・ザマンが並々ならぬ興味を示してくれた。知的好奇心を大いに刺激されたようだ。用事があって経理室に來たついでに、かならずエクセル関数の操作方法を尋ねるのだ。自習したが分からないと前置きして、複数のシートを串刺しするにはどうするのか、合計範囲を指定するときに\$マークを使うのはなぜか、四捨五入の関数は実際にどんな場合に使うのか:等々、質問の内容はひとつひとつが具体的だ。

ある日、ヌール・ザマンから松永君を介して宿舎を訪ねたいとの打診があった。勤務時間中は忙しく、教えてもらう時間がなかなか十分に取れない、というのが理由だ。

熱心な生徒は、教師にとっては宝、それを拒絶しては教師失格だ。宿舎で私は演習用のテキストを作ったり、松永君が点検し終わった会計票簿を元に、もつとシンブルで誰もが容易に扱える票簿は如何、あれこれ思案し新規のデータベースを試作するためパソコンと睨めつこの毎日だったが、誰が来てもなんら支障はないし、何よりヌール・ザマンの学習意欲が私にはうれしかったから、もちろん私は彼の訪問を快諾した。

ヌール・ザマンが宿舎に私を訪ね、エクセルの操作についてあれこれ質問し、私がそれにていねいに答えることで、それを契機に私も彼とより親しくなれたように思う。が、このことが実はジア医師の機嫌をかなり損ねたらしいと、後日私は知らされ、とてもショックだった。ヌール・ザマンが上司をさしおいて、いわゆる「上司の頭越し」に特に何か出しゃばったわけでもないだろう。

できるだけ近い将来、アフガン人職員が自分達の力で自立的にPMSを経営できるようにするためにも、ヌール・ザマンのような若



始業前の朝礼。事務所の玄関前に集まった職員をザブール(中央)が点呼した後、一日の労働に励むようGMのジア医師(左)が訓示する。朝礼の後段では、全員がかならず神へ祈りを捧げ、両手で頬髭を撫で下ろす。



給料日の元日、作業現場から PMS 事務所に駆けつけた三人。左からアルサラ・ハン（植樹担当）、アジマール・ジャン（植樹担当）、タラブダール翁（重機担当）。一昨年、炎天下で共に汗を流した仲間だ。

い実務能力の採用が、今後もっと必要になってくるはずだ。地縁血縁がものを言い、家柄や人脈が幅を利かし、その上、上下関係で自由な行動が束縛されるというのであれば、有能な若い人材を発掘し、あるいは教育し、登用するのはとても困難だ。

福岡とチャットで結べたら

昨年九月以降、それまで残っていた日本人ワーカーも一人、また一人と日本に帰国し、PMS ジャララバードの日本人は現地代表を務める中村医師ひとりになった。この上、中村医師まで日本に撤退することになってしまったら……。

事務所の経営、特に経理などの経常的な管理業務は、まだ現地アフガン人職員だけではやりきれまいとの不安が関係者の間にあった。ジャララバード事務所の ICT 環境や経理システムの如何では、所詮、空論で終わってしまうことと承知しつつ、私にはこんなことができればいいなと秘かに期するものがあつた。

まず、ジャララバードと福岡をチャットで繋いでみよう。双方向的にウェブカメラで

互いの顔をパソコン画面に映し、音声でやりとりする。音声でのチャットであれば、パシエトウー語が表記できなくとも会話のできるワーカーが福岡の事務局には何人かいる。日常の挨拶や業務上の報告・相談はリアルタイムで可能だ。彼等の時差は国際電話同様やむをえないことだが、国際電話のような高額の費用負担はない。

もう一つはクラウド（ウェブ上の貸金庫）の活用だ。会計票簿のように日常的にデータを記録し点検が必要な票簿ファイルを「貸金庫サーバー」に保管しておく。専用のパスワードでアチラからもコチラからも貸金庫に保管したファイルにはアクセスできる。例えば、ジャララバード事務所で作成した会計票簿に会計処理上の誤りがないかどうかの点検が、福岡の事務局にいながらにしてでき、票簿へのデータ入力も可能だ。

治安が悪化し、日本人ワーカーを自由に派遣できない現状では、要はジャララバードと福岡を繋ぐ双方向的な通信手段として最新の ICT を活用してみたらどうか、それが私の考えだった。

十二月二五日以降一週間ほど、毎晩、宿舍の食堂でインターネット回線にパソコンを繋ぎ、日本にいる友人との間で実験を試みた。

結果、チャットメールは OK、難なくできる。「猫はみんな元気かな?」「みんな元気だよ、そっちはどう?」といった具合だ。が、アイチャットの音声・画像通信機能は思い通りに働かない。日本側の光ケーブルに対して、こちらア



中村医師の推挙で準職員に昇格したという植樹班一番の働き者ベラ。「ベラ」とは「壁」を意味する普通名詞。彼を「ベラ」（「つんぼ」）と呼ぶ当地では、しかし、彼を排除したりはしない。健常者と対等に働く機会を与え、苦楽を共有する。飯場事務所でも再会し、抱き合ってよろこんだ。

フガニスタン側は衛星回線だ。衛星回線の通信速度が遅いため、接続に時間がかかりすぎる。何度やってもタイムアウトしてしまう。

それでも試行を繰り返すうち、二回は完全に接続できた。「あれ、見える見える！見えたよー」の音声とともに、私のパソコン画面に友人のはしゃいだ顔と周囲の様子が映る。「元氣そうだね、今映っているそこが宿舍?中村先生もそこにいるの?」「ここは食堂、じき大晦日だね」そんなやりとりが数分つづいた。

いずれ衛星回線の通信速度が向上すれば、音声・画像機能を駆使したチャットメールが容易にできるようになるだろう。技術は日進月歩、今後に期待をつなごう。

毎日、経理室では松永君が、約半年分の溜まった会計票簿を忙しく点検していた。一つ一つ問題点を洗い出し、ハニフラやカービルに指示しては修正を加える。とても細かく面倒な仕事だが、事務所の経常的な業務のなかで会計はまさに「縁の下の力もち」、とても重要な。

一方、私は点検済みの票簿を松永君からもらい、勘定科目と貸借科目の同居する出納簿

とりあえず松永君から得られるデータを元

にして、汎用性の高いデータベースソフトの
ファイル・メーカー（F・M）を使い、一週間
ほどかけて会計票簿を新規に試作してみた。
P・M事務所では現行どのような貸借科目を
設定し、どのような貸借対照表を作成してい
るのか、その辺の知識がないため、現行の票
簿と即置換できる十全なデータベース作成と
まではいかなかったが、予想通り、より容易
に扱え、見て分かりやすい会計票簿が作れる
との確信は得られた。

今回の派遣は一ヶ月と短期であった。治安

のさらなる悪化が懸念されるなか、PMS事務所の経常的業務の支援や改善にはほとんど貢献できず、私個人としてはひどく欲求不満のまま一月下旬に日本に帰国した。また、機会が与えられるならば、そのときはこの欲求不満はぜひ解消したいと思う。PMSジャラバード事務所の経営をアフガン人職員に今後委ねるためには、彼らに対する継続的な職業教育が必要だと思うが、その分野で働けるならば私は本望だ。もちろん、植樹作業でもいい。インシャツラ！

——さまざまな経歴の強者たち

松永貴明

まず、年齢。おおよそでしか書いてないの

は、自分の正確な年齢を誰も知らんからです。年齢を訊くと、「タクリバン（だいたい）」という言葉がまず出てきます。だいたい一五歳だと言ひ張る一〇歳くらいの少年がいたり、だいたい三三歳だと言つていたのに半年

後にはだいたい三二歳だと言い、勝手に若返っているおちゃんもおります。

また、男性スタッフだけでは出てこないですが、これはホントに男しかおらんからです。医療事業には女性スタッフがいりますが、私が関わっていた水利事業では全くいません。ですから、ヒゲ面のおっさんたちしかないむさくるしい職場であります。

◎ムヒブラ…四〇歳代。ソルフロッド郡出身。水路事業の現場監督の一人。現場を監督するというよりも、自分自身も率先して作業をしているので、彼が日雇いの作業員たちのなかに混ざると、溶け込んでしまいくらいにわかるかなくなる。

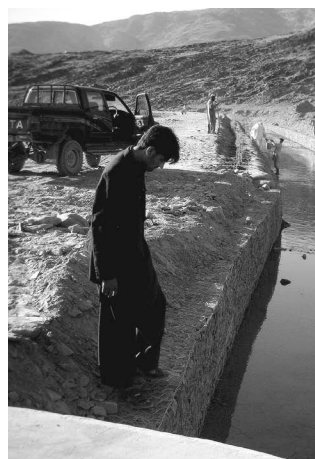
自身の作業に夢中になっているせいとか、他の作業員がサボっているのに気付かないことも。おもに水路底面の造成の担当で、一〇m毎に六〜七mm下がる傾斜をつける作業なので、測量チ



ームとの連携が重要で、測量を担当していた紺野さんとはよく組んで水路をどんどん進めていた。

◎ファザル・モハマド…あだ名はミタ・ジャン。三〇歳代後半。ブディアライ村出身。ダンブトラックドライバー。あだ名のミタというのは甘いお菓子のことで、子供のころ甘いお菓子を好んで食べていたのでそう付けられたそう。数年前に息子の一人を鉄砲の暴発事故で亡くすということがあり、失意のた

めか、一度 PMS を辞めている。三年ほど前に戻ってきて再びドライバーとして仕事に励み、水路現場で砂煙を舞い上げながらダンブトラックを飛ばしまくっている。誰に教わったのか「ミズノミマス」「ゴハンタベマス」「サイナラ」といった日本語を使っておどけてみせる愉快なおっちゃん。



ザイヌラ

◎セカンドール…三〇歳代後半。ソルフロッド郡出身。現在はトラクターのドライバー。身体は大きいのにあまり目立たないタイプ。

もともとは発破チームに所属していて、以前ダラエ・ヌールの井戸で、発破直後の井戸には有毒ガスが充満している危険性があるため入ってはならないというルールを守らず、意識を失いかけたことがある。幸いすぐに救出され、診療所で酸素吸入を行なったため事なきを得たが、当時ダラエ・ヌールの井戸を担当していた伊藤さんに怒られ、でかい図体を小さくしていた。

◎マシヨック・ハーン…五〇歳代前半。ジャラバード事務所の門衛たちのリーダー的存在。いつも穏やかな笑顔を見せているが、怒



セカンドール

るときとコワイ。内戦時代に家にロケット弾が撃ち込まれ、奥さんを亡くしている。今は再婚し小さい子供も何人かいる。ニングラハル州の穀倉地帯であるカマ郡の出身で昨年冬のカマ水路の取水口工事のとき、地元長老たちとの仲介に奔走してくれた。軍隊にいた経験もあり、規律に厳しく、しっかり仕事をするので、最近は食材の調達・管理なども任されている。

◎サブール…三〇歳代半ば。ダラエ・ヌール渓谷中流域のアムラ村出身で少数民族のパシヤイ族。事務職員。職員の出欠の確認や物品の調達や管理を担当しています。日本人のヴィザの取得も彼の担当で、日本人ワーカーのほとんどがお世話になっていきます。幼少期をカーブルでダリ語、少年期をバキスタンのイスラマバードでウルドゥ語、大学時代にジャラバードでパシュトゥ語と英語を習得している。もともとの母語であるパシヤイ語を合わせると五つの言語を操る。以前、なぜか役者をやってたこともあるらしい。

◎モハマド・ファヒーム…四〇歳代。ソルフ



マシヨック・ハーン

ロッド郡出身。井戸担当のエンジニア。いつもかったるそうな雰囲気でもかもしだしているが、内にはなにかアツいもの持っているおじさん。井戸事業の活動縮小



ファヒーム

の際、学のあるエンジニアが次々と辞めていくなかでただ一人残ってくれた。私と二度ほど大ゲンカをしたことがある。そういつたことがあっても、私に現地に残るように最も強く説得してきたのは彼だった。

◎ザイヌラ…二〇歳代前半。ドライバー。隣のラグマン州出身。ひょろっとした体型の生意気な若いのにちゃん。おしゃれで、いつもきれいな身なりをしている。私と組んで、ピックアップ車で水路現場を縦横無尽に駆け回っていた時期があり、工事現場なのでどうしても服が汚れる可能性が高い。そんななかでもきれいな服装で仕事に来て、服ができるだ



サブール

け汚れないように細心の注意を払いながら働いていた。そのエネルギーはもつと別のことに向けて欲しかったんですが。

◎ファザル…一〇代後半。PMSの正規スタッフではなく、水路現場で働く日雇いの作業員。以前は鬼木さんのチームで働いていた。鬼木さんの博多弁をなぜか解することのできる一人。まだ成長期なのか、今年四月に会ったときは以前に比べて大きくなっていてような気がする。作業中によく手や足に生傷を作っていた。働き者ではあるが少しドジなところがある。ときどき学校にも行っていたらしく、現場に顔を出さなくなることもあった。

今回、これを書くにあたって、現地スタッフのリストを眺めていました。約九〇名の正規雇用のスタッフ、いわば正社員です。彼ら全員の名前からそれぞれの顔や性格などを思い出すことができます。外国で勉強してきたエンジニアもいれば、字の読み書きができない門衛もいます。ソ連侵攻時、政府側にいた人もいれば、反政府ゲリラに加わっていた人もいます。難民となりパキスタンから十数年ぶりに戻ってきた人もいれば、難民にはなれず、または自らの意思でならず、内戦の最中でも国内に留まり続けた人もいます。様々な人たちがPMSで働いています。

また、正規スタッフだけではなく、水路現場などで日雇い作業員として働く地元住民。地元住民以外でも、早魃がひどく農業が壊滅状態に近い地域からも現金収入を求めて、

やってくる人たちもいます。そういった人たちがいるということも少しでも知ってもらえたらな、と思い書かせてもらいました。

現地では水路の本流は開通したとはいえ、漏水対策、排水路の整備や分水路の造成、開墾地の開拓と、やるべきことがたくさん残っています。水路の開通はきっかけに過ぎません。復興のきっかけ、平和へと繋がるきっかけです。まだまだ彼らの活躍は必要です。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは發送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の發送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

(新連載) サファル・バハエル! (良い旅を) — 3

グナア・ハーンの旅立ち 甲斐大策

大扇状地の下方、シアアの町バラチナールの上に夕霞がたなびき、その下は暗い。

少年グナアは坂を下っていく。下半身深部の激痛が一步ごとに全身へ膨らみ、内股を流れ下る血が止まらない。路傍に腰を下ろし、腫れた右手の甲に貼りついた叔父の血を眺めた。

グナアの父は、スピングル山地南のビール峠直下で、密貿易のおこぼれにあずかる小部族マンガルの族長だったが、グナアの出生直前、アフガニスタン側で変死する。実弟マンシイの仕業という者もいた。

疑惑はとも角、幼いグナアと母はマンシイのもとでしか生きる術がなかった。マンシイの嗜虐的な暴力に耐えながら、母は三人の子を産み、グナアは叔父に沈黙をとおす子に育つ。

客には、一族の美少年をはばらせてきた。際立つて美しいグナアは、六、七歳で席に出された。

割礼を終えた十歳の頃、叔父は接客の時のグナアに女装をさせるようになる。

十三歳になって間もない冬のある午後、グナアは物置きで、新しく詠えたゼルバラニイ(スカート)を試着させられていた。突然叔父が未知の行為を挑んできた。グナアはただ混乱し、そして脳天まで貫く痛みに悶絶したのだ。しかし混乱の極まる頭の片隅に、何かが決着する快感に似た思いが、それは肉体的にも確かに存在した。全裸で土間に横たわるグナアに背を向け、叔父は下ばきの腰紐のよじれを解いている。その背にグナアは手近かにあった斧を力の限り打ちこんだ。混乱は収まり、冷静だった。棚の向うで二頭のロバが数歩足踏みをした。仆れた叔父の顔面を殴りつける拳の関節がずれるのを感じていた。

夕闇の中、松葉杖を両脇に白衣の老人が上ってくる。老人の動きにつれ寄生蟲が蝕んで枯枝のように萎えた片足が揺れる。グナアは、両足を曳きずって歩きはじめた。すれ違ひざま、老人の一方の杖が唸りをあげてグナアの肩口に振り下ろされた。老人は大きくよろめきグナアは仆れた。ランゲ(賊)を擁護されたに信じて疑わない老人は、グナアを打ち据える。グナアの表情に苦痛はなく、おだやかな眼でバラチナールの方向を見ていた。

●事務局便り

*今年に入つて、ベシワールの市街地での爆破事件が頻発している。それは北西辺境州にとどまらず、イスラマバードやラホールにまで拡大し、内戦前夜の様相を呈している。主には、軍施設や警察の施設を狙ったものだが一般市民も巻き添えになつており、一百万人以上の国内避難民が出ているという。激化した契機は、パキスタン政府による反政府勢力に対する軍事行動だが、その背景にはアメリカ政府の強い圧力がある。そして北西辺境州の部族自治区を根拠地とする反政府勢力が活発化した始めた原因は、米軍によるアフガンからの無差別に近い越境攻撃である。巻き添えを喰つた民衆の怒りは米軍に対するだけでなく、その米国の顔色をうかがうパキスタン政府にも向けられている。その両者の敵意と失望を背景に、反政府勢力が勢いづいていく。まさに「反テロ戦争」の悪循環だ。

その市街戦の様相さえ常び始めたベシワールにあるPMS病院の現地NGOへの移譲が行われた。受け皿は、元事務長と現地スタッフで構成された民間団体である。以上の理由については本誌中村医師の報告にあるように、治安の問題だけでなく、一・二三年前から燦々していたPMSの法的根拠の問題(国際NGOと現地社会福祉法人の二重登録問題)があった。現地情勢が絡む複雑な登録問題で、この一年間の悪戦苦闘の上での結論である。現地ワーカーや私たちににとっては断腸の思いであるが、会員や協力者の

方々の理解を戴きたい。

また中村医師が記者会見し「来春には撤退もあり得る」と述べたことについて、皆さんからたくさんのご心配の声を戴いた。これも、パキスタンの急激な治安悪化に加え、大統領選による政情不安定や米欧軍増派によって、来春からのアフガン情勢の激変(毎年雪解け後に戦闘激化)が予測された上での発言である。むしろ来年の春までに、用水路工事を盤石なものにすべしという、中村医師の不退転の決意と受け取っていただきたい。まさに背水の陣、ベシワール会の総力を持って臨むべき冬の陣である。皆様方の深いご理解と熱いご支援をこそよりお願い申し上げます。

◎村から

ベシワール会に関わった切の掛けは、十二年くらい前、会員として支援されていた恩師の勧めでした。八年前、福岡に引越してから、事務局で切手の整理、お礼状書き、会報の発送等週二回手伝いに来ています。

最近、中村先生の講演会場で書籍の販売、募金をお願いしましたが、熱烈な支持者が多くいらしたのに感激しました。アフガンの人々が安心して生活できる場を作るため、ご自身のご健康を犠牲に、一途に進んでいく中村先生の姿に、いつまでも健康でアフガンの地で活動できる事を祈り、微力ですがこれからも手伝いができればと思います。(Y・Y)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む

中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 [3刷] 1890円

丸腰のボランティア

すべて現場から学んだ

中村哲編 [2刷] 1890円

空爆と「復興」 [2刷] 1890円

辺境で診る [3刷] 1890円

辺境から見る

ダラエヌールへの道 [3刷] 2100円

医者 井戸を掘る [10刷] 1890円

医は国境を越えて [6刷] 2100円

ベシワールにて [8刷] 1890円

アフガニスタンの大地とともに

[2刷]

伊藤和也 遺稿・追悼文集

アフガニスタンの復興を、その深きところで願った伊藤ワーカーの遺した足跡

A5判並製260頁 カラー90頁 1575円

聖愚者 甲斐大策の物語

1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24

電話092(714)4838

価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をベシワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル六〇三号) 〇九二―七三二―一三三七二内に置く。